

秋田県衛生研究所報

第 3 輯

昭 和 31 年 度

REPORT

OF THE

AKITA INSTITUTE OF PUBLIC HEALTH

(3)



No. 3

秋田県衛生研究所

秋田市土手長町 1

I DOTENAGA-MACHI, AKITA CITY,

1956

AKITA PREF., JAPAN.

卷頭の言

秋田県衛生研究所長 児玉栄一郎

躑躅が咲き、菖蒲が咲き、そして藤が紫の花総を垂れる頃となると私は冬帝の威を憎む心も和み、絢爛たる寂光土の光に瞳を細める。それならば読書や研究も大いにできそうに思えるが、冬季に堪かれていたいろいろの用件が怒涛のように四方から押し寄せて来る。機械でない肉身には疲労も加わる。やがて秋の行く頃になってようやく自分自身に立ちかえるのであるが、顧て後に残るものは胸を褐色に染める悔のみである。

人間が何を目的に生きなければならないかという問題を未だ嘗て明確にも腹氣にも指し示されたことのない私は、恐らくこの地球上のありとあらゆる生物も人間と同様な運命を担っているのではないかと類推する。人体を宿主とする病原微生物なども明日の運命を覚ることなしに宿主の諸器官に巣食っているのではなかろうかと思う。

いつの世にどこから人型結核菌、牛型結核菌が洩れ落ちて来て人間の肉体をにらうのか、造物主の意向が不可解と思われる一方、大腸菌など人の生活と不離不即の関係の中に生きていることを考えると造物主の幽遠な営みが心に見えるようにも思えて来るのが不思議である。米国 Notre Dame 大学の James Reyniers が動物を無菌的に飼育した場合に、現在非病原菌と見做されているものさえ有害に作用することを述べているから、生の機構は更に不可解である。

これは私が人間に優位を認めて他の生物を従とした場合の話であって、もしもこの地球上で少くとも現在ある限の生物がお互いに何らかの関連の下に生きる権利を有っている、人間といえども生きる限においては細菌やアーバと同位にあると解釈すれば問題の一部が解明されるようにも思う。「病気に特有な微生物は實際は病気の原因ではなくって、症候であるかも知れない」と George Bernard Shaw 翁が述べた言葉には多分の真実が籠っている。涯ない大空には太陽や月のみ照る場所ではなく、星も輝き、雲も行き、そして虹も懸るのである。

また世の中に愛は盲目であるという。しかし私には生きえ盲目であるかのように思われる。人間には精神があり、思考力があり、そして下等生物にはそれがないという。しかし塩類は硝子のビーカー内で意志あるものように結晶する。人間などという生物は宇宙の真に限られた一定条件の中においてのみ生を保っているに過ぎないのであるから、もしも明日の安寧を念うならば明るい今日の中に準備をしなければならない。対象としてそれが眼に見えるものに対しても、見えないものに対して同様で、換言すれば、細菌やウイルスのような微生物に対しても、また敵意ある非人道的な策略や怠慢などに対して同様である。

次に少しく角度を変えて申し上げて見たいと思う。人は家畜を飼い、細菌学者は微生物を試験管内の培地に飼う。しかし人間は人間を飼っても飼われてもならない。人間は飼われた場合は自主性を失い、自主性を喪った国家はやがて滅亡するからである。

以上言葉が傍路へ外れたが、これは私が日本同胞を思うからであって他意はない。さて今回わが衛研は小さいながら、ようやく第3輯を世に出せることとなった。これは県厚生部の諸賢のみならず、県民の多大な心の温い援助があったことをまず感謝しなければならない。そして今後とも一層私共を指導と激励と援助せられんことを望んで止まない次第である。